

チェンマイ大学での貢献 (86)

伊藤信孝

チェンマイ大学客員教授・工学部

社会にはいろいろな世界がある。これはまたその逆も然りと言うことでもある。すなわち世界の中にもいろいろな社会があると言い換えることもできる。いわば世界と言えれば大きく、地球規模で言うならばワン・グローブ (One globe) と言う事である。しかし人間社会が構成する組織の中には異なる業種の組織で分けられる世界がある。例えば政界、学会、芸能界、角界、財界、経済界、産業界、・・・などである。人間は法の下では平等であるが、人間が集団として集まり、某かの目的に向かって志をひとつにして活動を効率的に行うにはその中にその組織を円滑に管理運営する方法としての地位やポストがその組織の趣旨、目的に沿って必要な数及び種類だけ用意されている。民間の私企業では組織として利益を上げると言う共通の目的があり、その目的達成に最適な組織が形成されている。またNPOやNGOはその名の通り利益、報酬は二の次で、種々の社会や自治体への奉仕的活動が主となる。しかしその構成員の全てがそうした高貴な志を持った仲間であつてつながつているというわけではない。組織の一員として参加して居るがそうした意識を持ち合わせず、これまでやってきた自分の専門性を何ら変えることもなく、また変えようという意欲もなく、これまでの延長線上で組織という名前のもとで取得した予算で食いつないでいるような組織もある。

ところで本報では学界の話題をとりあげ記事とする。後半はコロナウイルスにも触れる。筆者自身が大学から離れたところで仕事をした経験も無いので、他の社会については余り知らない。それだけに大学の外の世界(社会)と大学人が考える常識に大きな差があることを十分承知し、俗社会でも当たり前につきあつて生きていけるよう自らを戒めてきた。それだけに在職時代からも「大学の先生は・・・などと言われることを極端なほど嫌った人生を生きてきたと考えている。例えば「大学の先生は良いですね、毎日大学に行っても行かなくても良いのでしょうか？」などと言われる事に特に嫌悪感を持っていた。どうしてこのような言葉が大学の外の社会から言われるのか、非常に腹が立ったのである。たしかに社会科学の先生の中には週に2回ほど大学に来て、自分の講義を済ませると残りの日は他大学へ非常勤講師として出向く人が多く、したがって自宅も大阪や京都、奈良、時には東京から出向いてくるという勤務状況の人がいたし、連絡を為しても容易に、また迅速に会うことも難しい状況であった事実を知る筆者には「なるほど世間は大学の先生と言う職をその様に捉えているのか」と悲しく、腹立たしい思いを為てきたのを覚えている。反論しても意味はないので、そうした言葉に否応なく聞き流すしかなかった。しかしその同じ大学内でもいろいろな人(種)がおり、大学で無ければ到底生きていけないであろう常識の人も多々いる。これが大学であり、いわば特殊な世界という言い方も成り立つ。以前にも

これに類したことは書いたが、大学の先生といえど商人的な人もいれば政治家もいる、口ばかりで行動が伴わない、なかば嘘つきと言うレベルの一步手前のような人もいる。頻繁に職場を変えるほど大学人は大学を移籍することは少ないから一度座ったその籍を離れる事は、余程の事情がないと極めて希である。大学の教員はその専門に応じて関連の学会に会員として属している。会費を払いその会員資格を維持している。自分の大学で自らが所属する分野がなくなると学会からも抜けると言う教員もいる。なぜ自分が関連する大学の専門分野に博士課程ができないのか、その原因は何なのか、その原因を創っているのが自分達であると言う事に気付くこともなく、学会に出て発表することもない、その様な信じられない大学の教員がいるのをこれまで見てきた。それでも身分が剥奪されることもなく教員としてその身分を保証されているという考えられない場合もある。勤務時間が来ればそそくさと帰宅し、知人や身内が経営する予備校の講師としてのアルバイトに精を出す。必ずしも予備校の講師というサイド・ジョブに限らず企業の顧問か相談役の肩書きを持ち、本職よりもサブの方がメインになってる大学の教員はタイに限らず周辺の国々でも目にする事ができる。大学教員としての最低必要資格である博士の学位を取れば、その後は上記の様な生活スタイルというのが日常化している。基本にあるのは大学教員としての「低収入」という所にあるようだが、聖職であり、人材育成に教育を通じて社会に貢献すると言う「志」がないようである。海外留学して資格を取得しても母国では自分をそれなりの身分で受け入れてくれる「場所がない」と言う国がアジアにある事も理解している。幸にも語学が堪能で先進国での就職の方が収入、身分、処遇を考えると選択肢が結果としてそのようになる場合もある。同じ資格を取得しても母国と海外では収入に大差があり、自ずと帰国という考えにならない悲しいケースも多々ある。国の支援で留学して資格取得後は自国に戻らず海外で就職というケースを選択しなければならないとしたら哀れである。

さてその様にして海外の大学に就職し、国際舞台で真に実力勝負を発揮できる人はそれなりに高い評価を得る事が出来るが、そうした人材の中には、自分の専門に対し真に学術的、科学的であるかという、やはり多かれ少なかれ政治的な要素を併せ持つ人が少なくない事も事実である。そうした人材が将来的に学会で重要な地位を占め、派閥を創り独裁的とも思える行動が目立つようになるのも問題の一つである。学会という組織で与えられた要職以上に影響力を及ぼす姿勢に本人が気付いているかどうかは定かではないが、姿勢が変わらない、あるいは変えない挙動から判断すれば、それがその本人の意思（意志）と言うことであろうとしか解せない。

最近のニュースは中国・武漢で発生のコロナウイルスの話題で持ちきりである。あつという間に世界的な感染に発展し、地域差は有る物の未だその勢いは余談を許さない。1, 2ヶ月間という、あつという間に約 200 ヶ国ちかくの国々に感染者が拡がり、まさに世界的大流行となった。新型コロナと言う事もあり対応が後手後手に回り、急激な死者を出すに至った国もある。また一度は収まったかに見える症状も再度発症するのではとの危惧もある。つぎ込んだ経済的支出も大変な量である。死ぬ必要も無い人が世界で 70 万人余も死ん

でいる(2020年4月末現在)。残された遺族も毎日悲しみに暮れている。

筆者は国際交流事業における必要かつ重要な事は「協調と競争である」と強調してきた。その根拠となる考えは、事業の趣旨、目的が貢献でなく自分自身、または自分を取りまく仲間への利益誘導であり、世界、社会への貢献からは余りにも程遠い事業が多いからである。逆にそうしたグループが自分たちが利益を得るために、能力とは別に都合の良い「人」をそのポストに座らせるべく推挙、選出する。

ところで本報では学界の話題をとりあげ記事とする。筆者自身が大学から離れたところで仕事をした経験も無いので他の社会については余り知らない。それだけに大学の外の世界(社会)と大学人が考える常識に大きな差があることを十分承知し俗社会でも当たり前につきあって生きていけるよう自らを戒めてきた。それだけに在職時代からも「大学の先生は・・・などと言われることを極端なほど嫌った人生を生きてきたと考えて居る。例えば「大学の先生は良いですね、大学に行っても行かなくても良いのでしょうか？」などと言われる事に特に嫌悪感を持っていた。どうしてこのような言葉が大学の外の社会から言われるのか、非常に腹が立ったのである。たしかに社会科学の先生の中には週に2回ほど大学に来て、自分の講義をすませると残りの日は他大学へ非常勤講師として出向く人が多く、したがって自宅も大阪や京都、奈良、時には東京から出向いてくるという勤務状況の人がいたし、連絡を為しても容易に、また迅速に会うことも難しい状況であった事実を知る筆者には「なるほど世間は大学の先生と言う職をその様に捉えているのか」と悲しく、腹立たしい思いを為てきたのを覚えている。反論しても意味はないのでそうした言葉に、否応なく聞き流すしかなかった。しかしその同じ大学内でもいろいろな人(種)がおり、大学で無ければ到底生きていけないであろう常識の人多々いる。これが大学でありいわば特殊な世界という言い方も成り立つ。以前にもこれに類したことは書いたが、大学の先生といえど商人もいれば政治家も居る、口ばかりで行動が伴わない、なかば嘘つきと言うレベルの一步手前のような人もいる。頻繁に職場を変えるほど大学人は大学を移籍することは少ないから一度座ったその籍を離れる事は、余程の事情がないと極めて希である。大学の教員はその専門に応じて関連の学会に会員として属している。会費を払いその会員資格を維持している。自分の大学で自らが所属する分野がなくなると学会からも抜けると言う教員も居る。なぜ自分が関連する専門分野に博士課程ができないのか、その原因は何なのか、その原因を創っているのが自分達であると言う事に気付くこともなく、学会に出て発表することもない、その様な信じられない大学の教員がいるのをこれまで見てきた。それでも身分が剥奪されることもなく教員としてその身分を保証されているという考えられない場合もある。勤務時間が来ればそそくさと帰宅し、知人が経営する予備校の講師としてのアルバイトに精を出す。必ずしも予備校の講師というサイド・ジョブに限らず企業の顧問か相談役の肩書きを持ち、本職よりもサブの方がメインになつてる大学の教員はタイに限らず周辺の国でも目にすることができる。大学教員としての最低必要資格である博士の学位を取れば、その後は上記の様な生活スタイルというのが日常化している。基本にあるの

は大学教員としての「低収入」という所にあるようだが、聖職であり、人材育成に教育を通じて社会に貢献すると言う「志」がないようである。海外留学して資格を取得しても母国に自分をそれなりの身分で受け入れてくれる「場所がない」と言う国がアジアにある事も理解している。幸にも語学が堪能で先進国での就職の方が収入、身分、処遇を考えると選択肢が結果としてそおよくなる場合もある。同じ資格を取得しても母国と海外では収入に大差があり、自ずと帰国という考えにならない悲しいケースも多々ある。国の支援で留学して資格取得後は自国に戻らず海外で就職というケースを選択しなければならないとしたら哀れである。さてその様にして海外の大学に就職し、国際舞台で真に実力勝負を發揮できる人はそれなりに高い評価を得る事が出来るが、そうした人材の中には、自分の専門に対し真に学術的、科学的であるかという、やはり多かれ少なかれ政治的な要素を併せ持つ人が少なくない事も事実である。そうした人材が将来的に学会で重要な地位を占め、派閥を創り独裁的とも思える行動が目立つようになるのも問題の一つである。学会という組織で与えられた要職以上に影響力を及ぼす姿勢に本人が気付いているかどうかは定かではないが、姿勢が変わらない、あるいは変えない挙動から判断すれば、結局はそれがその本人の意思（意志）と言うことであろう。要職など人の上に立つ人はこれぐらいの高貴な心構えを維持して欲しいものである。このことは必ずしも学会関係に限ったことではない。組織における自分の立ち位置、責任感、果たすべき義務に対する感覚が甚だしく異なっているか、認識のレベルが余りにも低い事に起因する悲しい結果である。今回のコロナウイルス騒動がもたらした教訓は筆者が掲げる「協調と競争」の精神を持たない利己的な国家や組織の指導者が未だに居る事、自宅待機、休業要請にむしろ挑戦的な姿勢で反応する人々などがあること。さらに驚くべき事は生命の安全保障より経済活動が優先する現象である。昔は命が最重要であったが今はそうでなくなっている。時代は大きく替わった感がする。考えてみればこれも致し方ない事なのかも知れない。働かなければ収入はゼロになる。そうなれば食料も買えない。食べるものが無ければ、いずれは死ぬと言うプロセスが頭に浮かぶ。命さえあれば、命が最優先に重要と言う考えだけでは、生きていけない時代になっているのである。自分だけではなく家族がいる。車やスマホ、パソコンや家屋はかつては夢の贅沢品であったが、今や日常必需品である。収入が無ければその維持管理もできない。その結果ウイルス感染が危険と思われる経済活動をせざるを得ない窮地に追いやられる。安全保障より経済活動優先という思いが表面化した例でもある。しかし経済活動は個人ではできない。必ず相手が有り、マスクをして、できる限り感染を防ぐ準備のもとでの社会的距離を維持していても感染すれば自分だけでは済まない。感染させる側とされる側の双方が傷つき、どちらの選択肢が良いかで決断ができずディレンマ (Dilemma) に陥る。この苦境をビジネスチャンスと捉え不良品を高値で売りつけ、濡れ手で粟の金儲けを企む輩は何時の時代にもいる。人間社会は思うほどに成長はしていない。ひどいレベルになると周回遅れのトップランナー的な桁外れの考え方も未だに見られる。同じ対応をしても感動を持って歓迎される行動もあれば、その行動に非難が集中し、信頼感をなくし孤立

化に向かう個人や組織、また国家もある。

グローバル社会に成ったというだけに情報の伝わり方は極めて速い。しかしそれは情報のみに限らず交通機関技術の飛躍的な発展で病気の感染も保菌者の移動で瞬く間に世界の隅々にまで拡散した。巷では今回のウイルス騒動を第3次世界大戦と言う表現もあるが、まさに的を得た点も少なくはない。精確な情報の速やかな開示と共有の重要性は「協調」によってカバーされるべきである。また自己が生じた後の対応処理には素早い対応としての「競争」的協調が望まれる。精度が高く、迅速に処理をこなすことができるPCR (Polymerase Chain Reaction) 検査に用いる機器の生産と増産、急を要する時期にあっても何がどの程度必要であるかと言う瞬時の決断と見極めという観点から日本企業の素早い対応の例を挙げると以下の様になる。異業種の企業が、自社が持てる技術力を駆使して対応に望む姿勢は感動さえ呼び起こす。

- 1) 日産自動車が3Dプリンタを用いてプラスチック・フェイスシールドの生産を開始
- 2) トヨタ自動車がマスクを生産
- 3) 同じマスクでも抗菌マスクを群馬大学の板橋英之教授らが大学発ベンチャーのGUDIアイ社で生産供給
- 4) コロナウイルス発生初期の段階から注目されたアビガン富士フィルム・富山化学開発のアビガン錠剤の増産供給
- 5) 大村 智ノーベル賞受賞者（北里大学）の業績によるイベルメクチン、
- 6) 胃腸薬でラッパのマークの正露丸で有名な大幸薬品のウイルス除去製品「クレベリン」がコロナ対策になるかが注目されている。
- 7) 島津製作所は田中耕一（ノーベル賞受賞者）氏も加わり検査機器の検査時間を従来の2時間を1/2に短縮する機器を開発
- 8) 米国イノビオ・ファーマシューティカルズは、米国のバイオ医薬品企業。癌や感染症に焦点を当てたワクチンや免疫療法（合成ワクチン）の開発に従事。予防用合成ワクチンと治療用合成ワクチンを提供する。また、ヒトパピローマウイルス・子宮頸癌、鳥インフルエンザ、前立腺癌、白血病、B型・C型肝炎ウイルス、HIVなどの臨床プログラムを手掛ける。
- 9) 人工呼吸器ECMOを小型化し、迅速な異業種への対応 危機をチャンスに変える（常に対応できる準備）
- 10) 珍しい分野ではキャンピング・カーを用いて医療業務者を家族から完全隔離で感染から防護（救急医療関係者保護）する事にどれだけ効果があるかを試すビジネスも現れている。
- 11) ギリアド・サイエンス社、レムデシビル 新型コロナの“治療薬候補”『レムデシビル』
(20/04/17) シカゴ大学での臨床試験

など持てる技術を背景とした迅速な生産供給体制によるグローバル社会への貢献をみることができる。

一方、自宅待機を余儀なくされた側は通常の業務から隔離され、何かにつけて遅れを伴う生活を強いられている。ここでまた遠隔授業の展開が大きく目を開こうとしている。国際会議やシンポジウム、ワークショップなど従来定められた場所に関係者が一堂に会して議論するイベントが集会禁止となり、時間的制限も加わるとそれに代わる方法が模索される。情報通信技術の発展により即応体制で遠隔授業機器が導入、普及、実施へと急加速している。しかし直接顔を合わせての従来式講義には及ばない部分も未だ多々有る。コロナ騒動が収まるまでの一時しのぎで終わるかも知れないが技術革新のまたとない機会でもある。信頼性のない製品をビジネスチャンスと解して高値で売りつけても「まともな商い作法」とは評価されず益々信頼性を落とすだけである。社会から期待される企業、期待される製品（商品）である事が先決である。折しもコロナウイルス禍で普通なら多くの同僚学生の参加もあって催される修士課程の学生の公聴会があったが、その様な状況は無理であり Zoom を用いた形態となった。当該修士学生と指導教員を含む 4 名の審査員（1 名は他大学の教員でオンラインで参加）で行われた。筆者はオブザーバーとして参加した。講演発表はタイ語であるから筆者には殆どわからないが、これまでの当該学生とのつきあいの関係から何を為てきたかは理解している。30 分程の講演発表が終わりしばし時間を取って審査員がそれぞれの審査結果を披露し、まとまった時点で学生を呼び、審査の結果とともにさらに修正を加える部分、質問事項に対する本人の反論を添えて、決めた日時までに論文提出することで終了となった。同僚の学生も 2 名ほど聴講に参加し、審査員への飲み物や資料の配付、会場整備、機器の調節・調整準備に協力してくれた。事務官が来て審査員には公聴会出席の証としての署名を求め記載されると終了となる。以下に示す写真は修士学生の論文発表公聴会の模様とコロナ禍で町中のレストランでの食事が禁止され、テイク・アウトが許された環境で、デリバリー・ビジネスが盛んになり、町中のレストラン前で注文のメニューが出来上がるのを待つ配達バイクを示す。日常必需品の購入はできるが関連の店の多くは閉店している。



図1 ZOOM を用いた修士課程学生の修士論文公聴会の風景（右端が発表中の学生）



図2 顧客の出入りを一カ所に限定し、周りをテープで囲ったマーケット風景
野菜、果物、魚類、肉類、揚げ物、卵、日常必需品（靴、家庭清掃道具、各種洗剤など）が殆どこの市場で揃う。